

# 発話量の推移からみた認知症高齢者と ホームヘルパーとの会話

小野田 貴 夫

## 0. はじめに

中程度の認知症高齢者とホームヘルパーとの二者間の会話をケースとして、二者の発話量の時間的な推移をグラフにすることで、主に次の2点について論じていく。

一つは、話者の状況的な変化と発話量の変化との関連についてである。本ケースでは、居室のなかでの会話の量と、車いすを使って散歩（外出）している時の会話の量との間に差があることが、グラフから確認できる。居室と外出（車椅子散歩）という環境的でもあれば行動的でもある状況的な差に応じた会話の量（発話量）の差について考察する（1. 状況の変化と発話量の変化）。

もう一つは、話題の選択と発話量の変化との関連についてである。本ケースでは、発話量のグラフ上の推移が、いくつも山と谷を作る様子が見て取れる。発話量が平均より突出して多くなっていたり、多いまま維持されている個所は、会話を促進させる話題が選択されており、またそうした話題は次の話題への連想<sup>1</sup>を促していく可能性が高いと考えられる（2. 発話を活性化する話題の選択、及び3. 話題の連続性と連想の強さ）。また発話量が少ないままの個所は、会話を活性化させない話題が選ばれていたり、話題そのものが安定しないで次々と変わっていくと考えられる。また、山→谷→山と発話量が推移するところは、それまでの話題が停滞したり、途切れたりした後にもまた別の話題に移行しながら再び会話が活性化していく個所にあたるが、そうした過程の生じる要因について考察していく（4. 話題の断絶と転換）。

ヘルパーと高齢者の発話量の推移を別々に描いてみると、ヘルパーの発話量のほうが、高齢者よりも1.5倍ほど多いが、ある特定の話題に関しては、高齢者のほうがヘルパーよりも多く話していることがグラフから確認できる。こうした観点も取り入れながら、話題の選択や転換の様子を読みとっていく。

## 0-1. 調査対象

記録日時：2006年12月24日15時～(30分間)

対象者：

要介護高齢者A氏（以下、高齢者A氏、A氏） 68歳男性

要介護度3 脳梗塞後遺症（及び末期胃ガン）

移動・行動 介助による数メートルの歩行は可能。車椅子への自立移乗は不可。

ベッド上及び車椅子上での座位保持は可。

認知症 長谷川式認知症スケール18点 その場での会話はスムーズに行えるが、最近のことは覚えていない。

ホームヘルパー（以下、ヘルパー） 30代後半 女性

会話時の状況：訪問介護・身体介護（主には外での車いす散歩のための介助。身の回りの整理及び必要時には清拭、排泄介助を実施。）

## 0-2. 調査方法

ボイスレコーダーを、訪問介護開始時に居室内の適当なところ（机の上等）に置き、外出時には、ヘルパーの首から下げてもらふ。操作は、ヘルパーが行う。

## 0-3. 発話量推移グラフの作成

ここで言う発話量とは、記録された音声を書き起こした文字数のことを指す。音節やモーラといったより厳密な物理的な側面（また意味の量や価値といったより抽象的で主観的な要素を含んだ側面）から、発話量を定義することは可能であろうが、本論では、もっとも素朴なかたちで、書き起こした際の漢字、ひらがな、カタカナ、句読点の区別無く文字として扱い、その数を発話量とした。したがって、音声としての言葉から、何を漢字として扱い、どこに句読点を置くか等、恣意的な要素が入りうるが、あくまでも相前後する発話間での相対的な量の変化を確認することが本論での目的であるため、厳密さより扱いやすさを優先した。文字数の数え方は、約10秒ごとの要介護高齢者及びヘルパーの会話内容を最小の単位とし、その間の文字数を数えた。実際には、表1のように表計算上に、通し番号(「Num」)、10秒ごとの「時間経過」、「発話者」(要介護高齢者／ヘルパー)、一度のターン内での「発話内容」及び「文字数」、さらに「10秒毎の文字数」の項目を用意し、データを入力した。<sup>ii</sup> さらに、10秒毎の文字数の推移よりも大きな時間間隔として、「30秒毎の文字数」、「60秒毎の文字数」、「120秒毎の文字数」と用意した。<sup>iii</sup>

表 1

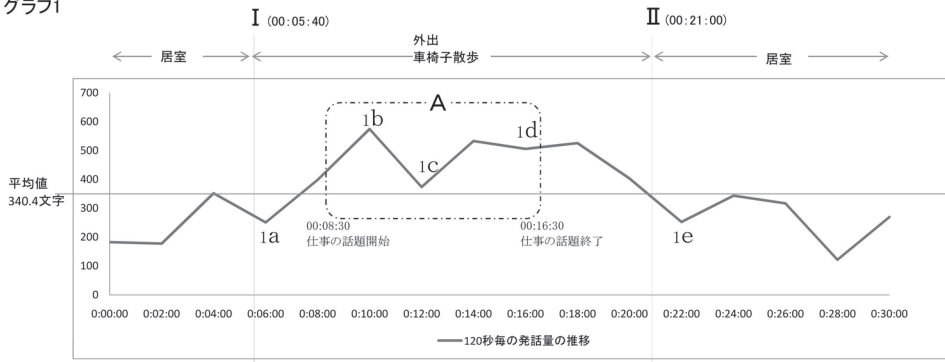
Num	時間経過	発話者	発話内容	1ターンの文字数	10秒毎の文字数	話題の展開
326	0:17:40	ヘルパー	て、もっと言葉が通者になって。	15	63	「孫のこと」
327		要介護高齢者	なってね。	5		
328		ヘルパー	まだ憎まれ口叩かないから。	13		
329		要介護高齢者	叩かないからいいけど。	11		
330		ヘルパー	悪い言葉を覚えてくるですよ。	14		
331	要介護高齢者	そうだね。	5			
332	0:17:50	(無音)		0	0	
333	0:18:00	ヘルパー	うん。	3	27	
334		要介護高齢者	あのうちはね、	7		
335		ヘルパー	はい、	3		
336		要介護高齢者	いいとこのおうちだよ。	11		
337		ヘルパー	まあ、	3		
338	0:18:10	ヘルパー	確かに見たからに良いとこって感じ。	17	61	
339		要介護高齢者	うん、そう。	6		
340		ヘルパー	すごい大きいですもんね、ここ。	15		
341		要介護高齢者	ねえ、	3		
342		ヘルパー	なんかのお店かと思いましたよ、前。	17		
343	要介護高齢者	うん。	3			
344	0:18:20	ヘルパー	でも、こら辺は本当に大きいおうちが多いですね。	24	54	「大きな家」
345		要介護高齢者	多いね。	4		
346		ヘルパー	庭がたくさんあるおうちが。	13		
347		要介護高齢者	けっきょくお金があるおうち	13		
348	0:18:30	要介護高齢者	なんでしょうね。	8	49	
349		ヘルパー	うん、うらやましいわ。	11		
350		要介護高齢者	いかにも、金持っておうちは、こういうのがそうじゃね。	27		
351	ヘルパー	うん、	3			
352	0:18:40	ヘルパー	駅から近いですからね。	11	31	
353		要介護高齢者	そうそう。	5		
354		ヘルパー	それじゃなくても便が良くて、	15		
355	0:18:50	ヘルパー	大きいおうちが多いですね。	13	13	
356	0:19:00	(無音)		0	0	
357	0:19:10	要介護高齢者	こういう家は大丈夫だね。	13	47	「泥棒の入る家」
358		ヘルパー	ええ。	3		
359		要介護高齢者	泥棒に入られないようにしてあるだけ、入りやすいだろうな泥棒が。	31		
360	0:19:20	ヘルパー	泥棒。	3	39	
361		要介護高齢者	うん、この家は金があるなあ、とか ないないとかね。	25		
362		ヘルパー	すぐわかります？	8		

これらは、状況に応じた発話量の変化、話題の変化・転換に応じた発話量の変化を、ミクロな視点からマクロな視点まで眺めることができるようにするためである。この表を元に発話量推移グラフを作成した。

### 1. 状況の変化と発話量の変化 —居室内と外出（車椅子散歩）—

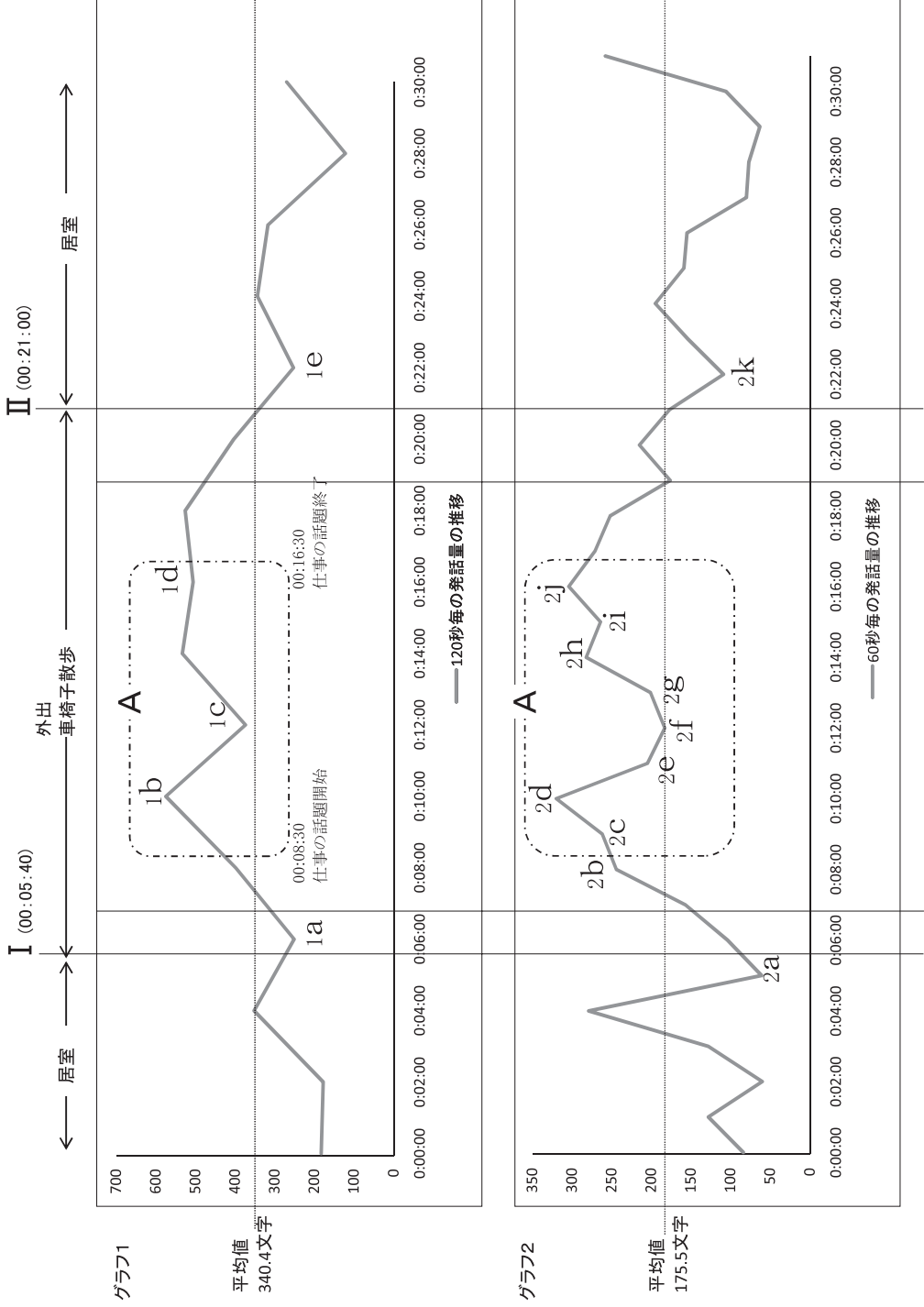
グラフ1は、120秒毎の発話量（高齢者とヘルパーの発話量の合計）の頂点を結んだ折れ線グラフである。120秒毎の発話量の平均値が340.4文字で、その値を水平に点線でグラフ上に示した。また居室（家）から外に出て車椅子での近所の散歩を開始した時点Ⅰ（00:05:40）と、散歩から帰ってきて居室（家）に到着した時点Ⅱ（00:21:00）に、時間軸に対して垂直に線を引いた。すると居室内よりも、外出時（車椅子散歩時）の方が、会話量が多いことがわかる。外出時は、前半のわずかな時間を除いて常に平均より多く発話されている。外に出たほうが、話が弾む、ということであろう。

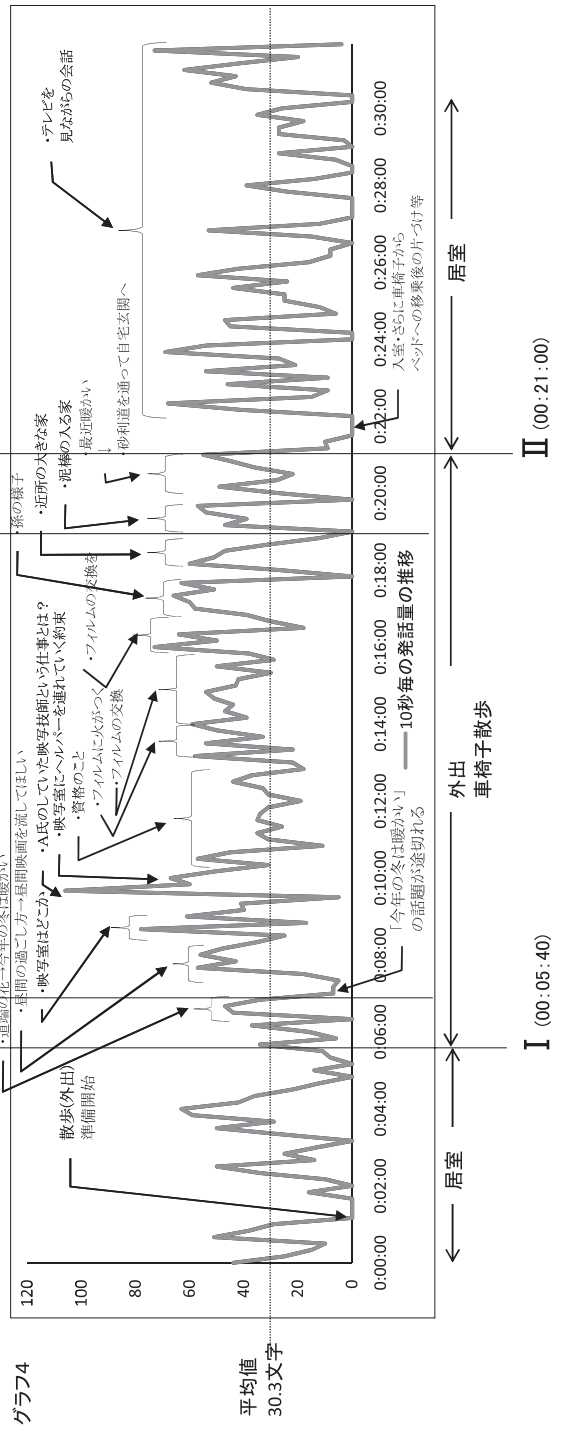
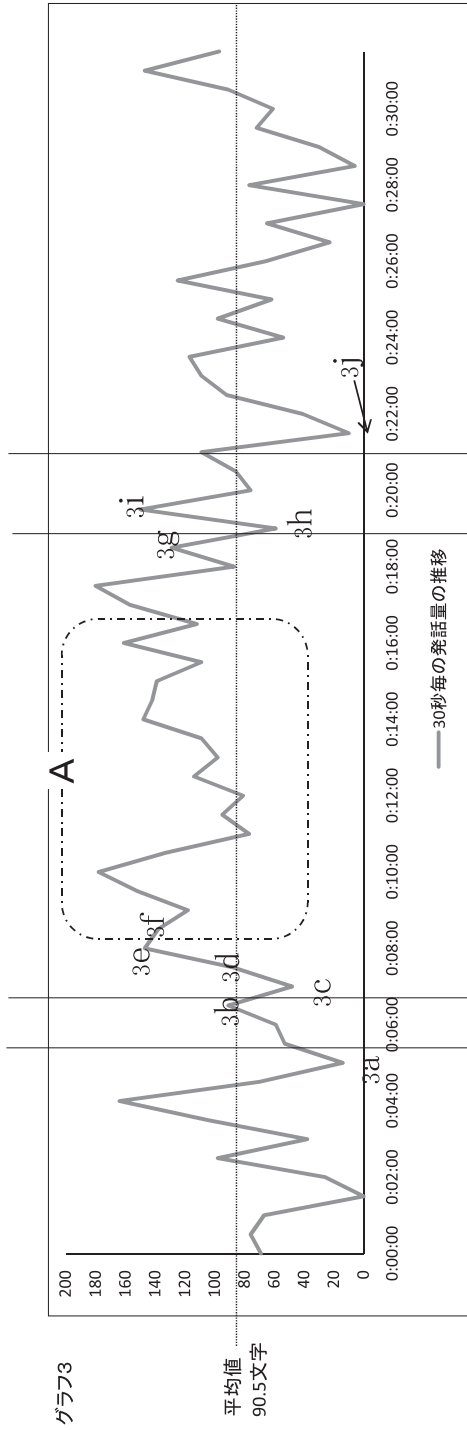
グラフ1



反対に、グラフ上の1aと1eの比較的大きな谷に注目してみる。つまり発話量が低い個所での状況を確認する。1aの付近は、外出の準備のための介助やしばらく留守にする居室の整理で高齢者A氏からヘルパーがやや離れることなどにより会話が減っていることが、発話量を下げる大きな要因となっている。1eの付近は、1aと逆で居室に入るための介助や、外にある車椅子の片づけなどでA氏から離れることで会話量が減っている。慎重さを要する動作や話者間の距離ができる等の物理的な事情による会話量の低下である。

こうした直接的に会話を阻害するであろう状況は理解しやすいものであるが、それらを差し引いても、やはり居室のなかのほうが、グラフ1では平均を大きく超えていくことはない。平均以上を常に維持している外出時とは対照的な発話量を示している。このことは、中程度の認知症があり要介護3である本ケースの高齢者A氏とヘルパーとの会話にとっては、外出によって会話が促進される可能性を示唆している。居室内ではA氏は、背もたれなしに自律的に座位を保持することは難しいので、ほとんどベッド上に水平に寝ているか、テレビが見える程度にギャッジアップした状態で過ごしている。行動や移動の制限が大きいために、得られる情報は、テレビから流れてくる番組や家族が居室に顔を出す程度を受動的なものに限られている。つまり居室内で、会話の話題を作ろうとすると、テレビをきっかけにするか、積極的に情報を作り出すしかない。一方、外出すると、体感や景色の変化に応じて新たな情報が受動的に入ってくる。実際に、外出時には、散歩による気温のことや眼に入るものが、





話題にされる。具体的には、次のような話題がある。

- ・「道端の花」
- ・「最近暖かい」（最近暖かい日が続き、今日も暖かいこと）
- ・「孫の様子」（車椅子散歩で家を出ていく時には、孫が走り回っていた。車椅子散歩から帰ってくる時には、寝ていた。）
- ・「近所の大きな家」

また本論では、推測の域を出ないが、外出による解放感や、移動そのものによるちょっとした高揚感も会話促進の要因として想定されうるし、またヘルパーの高齢者に対する献身的な姿勢や関わり方はもちろんのこと、直接向かい合うわけではない二者間の状態、つまり車椅子を後ろから押すという近距離でありながら対面的にならない独特なコミュニケーションの姿勢も、会話の促進に影響を与えているかもしれない。

## 2. 発話を活性化する話題の選択

相対的に発話量の多い外出中に何が話題とされているのか。どのような話題のとき発話量は増加するのか。外出時のなかでも、高齢者A氏が以前していた仕事に関連性の強い話題が連続的に話されている個所がある。そこをグラフ上に領域Aとして指定してみる。いわゆる回想法でも、過去の記憶がよく活性化され、よく話される話題である。

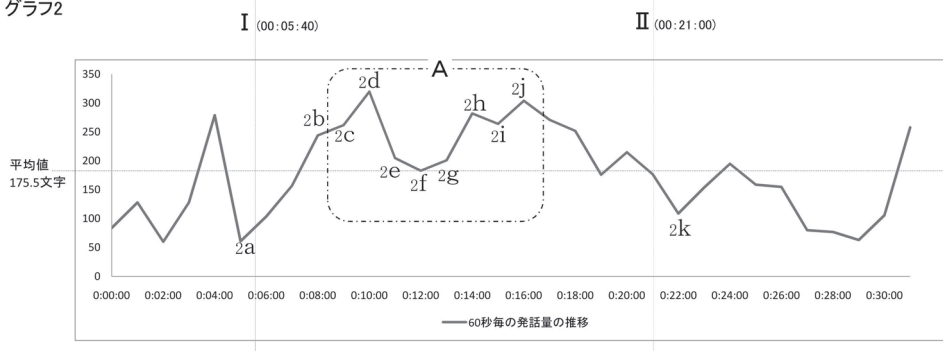
グラフ1の領域Aの中でも00:10:00前後の1bという山と、00:14:00から00:18:00に連なる1dというなだらかな山の二つがあり、この二つの山が、会話全体のなかでももっとも高くなっている。

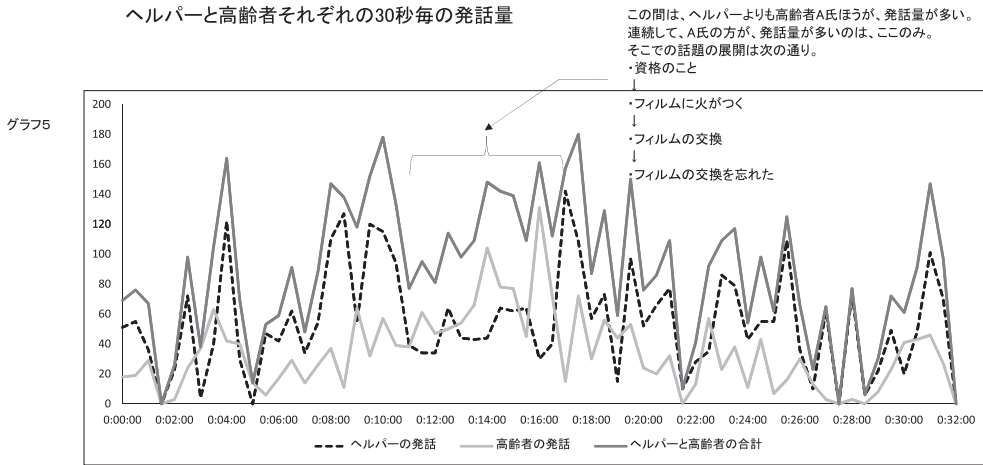
まず山1bの付近では、A氏の以前していた仕事場が話題になっている。具体的には、A氏が、以前映写技師をやっていたことから、映写室に関することが話題となっている。

続いて山1dの付近では、やはりA氏の仕事と関連した話題であるが、1bとの違いを強調すると、かつての仕事に関するより専門的な知識が話題となっている。具体的には、映写室のなかにあるフィルムや映写機に関する話題である。

会話全体の中でも頂点をなす1bと1dとの間に一つの谷1cができていて、領域Aのなかでは相対的に低い位置にあるが、ここも含めて領域Aでは、A氏の仕事に関することが話題となっている。補足すると、Aの領域以外では、A氏の仕事に関することは話題になっていない。そのような意味でも、本ケースにおいて、仕事という話題の選択が会話を活性化させると言える。

グラフ2





さらに仕事のなかでも特にどのような話題で、発話量が増加するのか確認してみる。つまり、より細かく話題を特定してみるために、60秒間隔毎の文字数の推移を記したグラフ2を参照してみる。すると、2d、2h、2jといった頂点が、特に高くなっており、そこで発話量が増加したことがわかる。

2dでは、映写室に関連してA氏がしていた映写技師という仕事とは何かということと、映写室にA氏がヘルパーを招待することが話題になっている。ヘルパーにとっては、詳しく知らないことで、かつ直観的に好奇心をもてる話題であることと、A氏にとっては、詳しく知らないヘルパーを前にして（また、そのことにヘルパーが関心を集中してくれることで）ある種の優越感を持ちながら話すことのできる話題であることが想定される。

2hでは、昔の映画フィルムが燃えやすいことが話題となっている。これも、やはりヘルパーは詳しくないことであるが、映写技師であった高齢者A氏にとってはよく知っていることで、いわば教えてあげるような立場で（そしてそれを促すようにヘルパーが会話を調節することで）発話が活性化している個所である。

さらに2jでは、A氏が「フィルムの交換を忘れてしまった」ことが話題になっている。ここの、2dや2hと同じパターンで、A氏の専門的な知識を披露できる話題である。

以上から、高い頂点を作っている発話量が多い話題の共通性とは、仕事に関することの中でも専門的な知識や立場を背景にして、A氏の優越感や自尊心を満たしてくれるような話題だと言える。こうした個所では、実際に高齢者A氏の発話量とヘルパーとの発話量を分けて折れ線で記したグラフ5を見ると、A氏の発話量の方が、ヘルパーの発話量を超えている（全体の発話量では、ヘルパーの方が、A氏よりも1.5倍ほど多く発話量が多いにもかかわらず）。

では、仕事が話題にされているなかでも、やや発話量が低くなっている2e、2f、2gでは、何が話題とされているのか。2eから2fにかけては、「映写技師の資格について」（甲・乙の二種類あること）が続けて話題となることで、領域Aの底辺を作っている。一方、2gは、発話量の多くなる2hで話題とされている「フィルムに火がつくこと」の最初の部分にあたるので、2e-2fとは、性質が違っている。そこでここでは、2e-2fの「映写技師の資格について」という話題に絞って考察してみる。



この資格に関する個所の会話の内容を追うと、映写技師の資格に甲と乙の二つがあり、することのできる仕事の内容が違うようであるが、A氏が、話題としておきながら、その説明が十分されていない。高齢者自身の認知症による症状のためか語られている知識が曖昧でわかりづらくなっており、話し方もたどたどしくなっている。そのため、ヘルパーもどこに関心を示してよいか、迷っていて、二人の会話はうまくかみ合っていない。そのため、相対的に発話量が下がっている。発話量が多い2d、2h、2jと同じように、仕事に関する専門的な知識を背景とする話題であっても、ヘルパーの関心をひける程度にはわかる内容でないと、ヘルパーも積極的に会話に参加できず、発話量もあがっていかない。そしてヘルパーが関心を示したり、話題をその次の関心へと展開させてくれないと、A氏も、話が停滞してしまう。

### 3. 話題の連続性と連想の強さ

領域Aのような発話量が高く維持されている個所で、ある程度話題に一貫性があるということは（このケースでは、高齢者A氏の仕事に関する話題）、そこでは、談話をつなげていく意味的な連想がよく働いていると考えられる。

改めてグラフ2の頂点をたどりながら話題が展開していく過程を記すと次のようになる。

2c. 「映画館の映写室はどこにあるのか」

↓

2d. (映写室の中で)「高齢者A氏がしていた映写技師という仕事とは」→(仕事の様子を見せてあげるために)「映写室と一緒にいく約束」

↓

2e.→2f. (映写室に入るための?)「映写技師の資格について」(二段階の種類あり、二段階目の資格保持者しか自由に映写室に入れない?)

↓

2g→2h. 「(昔の) フィルムには火が付きやすい」(だから資格が必要だった)

↓

2i. 「フィルムの交換」

↓

2j. 「フィルムの交換を忘れたこと」

先に見たように2e→2fの個所の発話量が、平均値付近まで下がっているが、後から見ると2i~2jにかけて再び発話量が増えていくための橋渡しをしている話題である。2e→2fの個所が、平均値並みであるという点では、やや専門的な話題であるが仕事に関する話題の連想、つまり仕事に関する意味的な連関の強さのなかにあって、話すべきことや話したいことがあり発話量が維持されていたと考えられる。仕事に関する話題が談話を作り上げていくための潜在的な可能性を多く含んでいること、別の言い方をすると、仕事という大きな話題が潜在的にたくさんの小さな話題を包摂していることが、発話量の継続的な維持となって表現されている。

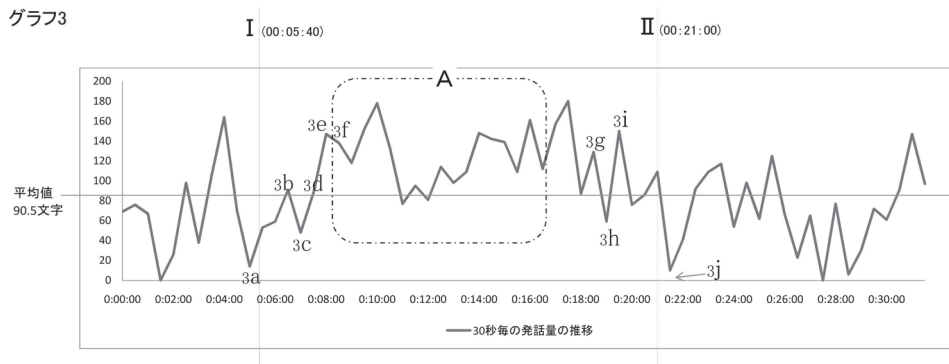


#### 4. 話題の断絶と転換

領域Aとは逆に、発話量が大きく低下している個所がある。その前後では、話題はどのように維持されたり、変化したりしているのか。

##### 4-1. 外出または帰宅のための発話量の低下 グラフ3の3aと3j

グラフ2を見ると、車椅子散歩のために居室から外へ出たり、外出から居室に戻るための準備のために発話量が減っている2aや2kという個所がある（それぞれ、グラフ1の1a、1eにあたり、「状況の変化と発話量の変化」の章ですでに取り上げている）。より細かく特定するために、30秒単位で発話量を記したグラフ3で確認すると、3aと3jの谷が、それぞれグラフ2の2aと2kに大きく影響し、対応していることがわかる。その前後で、話題はどのようになっているだろうか。



3aの部分は、散歩直前の準備で無声状態になったり（会話がなくなったり）、（玄関先の砂利道から舗装された道に出るまで）高齢者A氏に注意を促したりすることに注意が向けられていて、全体的に発話量が下がっている。3aの頂点より前の部分で、孫（2歳）が玄関先まで出てきたために、A氏とヘルパーがそれぞれ孫に話しかけたりしているが、A氏とヘルパーとの会話にはなっておらず、3aより後の部分でもほぼ同じような調子である。しばしば話題となりやすい孫のことも、高齢者の安全性が重視される行動（砂利道の移動等）と重なる場合には、優先されない。

3hの部分は、散歩を終えて玄関先から居室へと移動するところで、介助に必要な個所である。ここでは、断片的に話題が生じても返事程度で途切れてしまう。3a（外出時）では孫が注意をひく対象であったが、3h（帰宅時）では、長男が居室傍の廊下を通り過ぎることで、いったん話題となる。が、やはり居室に落ち着くまでの介助が優先で、会話としては継続されない。

外出時（3a）と帰宅時（3j）は、介助優先の状況的な条件によって、継続的な話題が成立しにくいのであるが、それは直感的にも理解しやすいであろう。ちなみに、外出（3a）以前に生じている発話量低下の主な原因は、やはり散歩に出かけるための準備である（IVHをしていることもあり、準備は慎重にされている）。孫が居室を出入りする等して話題になるのだが、準備が優先されるたびに会話は中断される。また帰宅時（3j）以降の発話量低下の主な原因は、A氏とヘルパーがテレビを集中して見ていることによる。テレビでは、競馬

の大きなレースが実況放送されていて、それらが話題にされる。が、馬がゲートに着くまでの様子や、レースの最中等、テレビに意識が集中すると会話は途切れ、発話量が一気に低下している。

#### 4-2. 外出時の発話量の低下と話題の転換

では、外出時の車椅子散歩中に、急に発話量が低下しているように見えるグラフ 3 の 3c や 3g の付近で話題はどのように展開しているのだろうか。

##### 4-2-1 「道端の花」(3b) から「昼間の過ごし方」(3d) への話題の転換

まずグラフ 3c での発話量を理解するのに、3b→3c→3d の話題の展開を確認する。

3b. (散歩中に目にとまった)「道端の花」→(花が咲くのも)「今年の冬は暖かい」(日が続くから)

↓

3c. (話題の停滞→買い物に行く嫁とすれ違う→車道を横断する)

↓

3d. (高齢者 A 氏の)「昼間の過ごし方」

3b では、すべてヘルパーが主導的に話題を作っている。まず「道端の花」が話題となり、それが本来は寒いはずのこの時期に咲いているために、「今年の冬は暖かい」ことが話題となる。ところが、ここで話題の展開は途切れてしまう。中程度の認知症のある高齢者 A 氏にとって、ヘルパーが投げかけた話題、「今年の冬は暖かい日が続いている」ということは、おそらく確信をもって肯定できることではなかった。会話を続けていくには、難しい話題だったのか、A 氏は、やや不自然な、真意がよくわからない返事をして、会話はいったん途切れてしまう。その様子は次のようである。

ヘルパー：今年は暖かいからかなあとって、不思議ですよ。

高齢者：いい感じだよ。

この後、さらに買い物に行く長男嫁とすれ違ったり、車道を横断する必要がある等して、長男嫁や A 氏に声をかけることはあっても、会話としては途切れたままとなる。その間約 30 秒ほどである。その後 (3d) に、次のように会話は再会される。

ヘルパー：本当に今日暖かくなりましたね。A さん、あれから昼寝でもしてた、今日は？  
(同じヘルパーが、午前中にも訪問介護に入っており様子を知っている。)

高齢者：うつらうつらしてたから、昼寝してたのかな。

ヘルパーは、30秒程前に会話が途切れる前の「今年の冬は暖かい」という話題とあたかも関連させるかのように「今日は暖かくなった」と、まずは前置きをする。そして間をおかず、A 氏の「昼間の様子」を聞いている(「昼寝でもしてた?」)。この話題の転換は、後に一気に発話量が増えていく大きな契機となっており、30秒程前に A 氏が関心を示さない(または示せない)ために途切れてしまった話題から、A 氏の関心のある話題へと段階的に移行させ

ることによって成り立っている。A氏が関心を示しづらい「今年の冬は暖かい」という長期的な客観的事実から、かなりの間隔（30秒程の会話の中止）をおいて、まずは「今日は暖かくなった」という現在の確認しやすい客観的事実へと話題をシフトしている。そして間を置かずに、今日は暖かくなったので心地よく過ごせただろうという連想から、「昼寝をしたか」というA氏自身の身近な事実へと話題を切り替えている。この話題の転換のおかげで、高齢者A氏自身を話題にすることができ、A氏が会話に参加する素地が作られた。この流れが、領域Aの高齢者A氏の仕事に関する話題へと繋がっていくことになる。

3cの個所でのいったん低下した発話量は、会話の停滞または中断を表している、同時にその後の話題の転換の契機となっている。この転換に成功しなければ、会話は停滞したままになるのだろう。が、グラフ3の3cのような鋭角な谷を作っている場合には、何らかの話題の転換が成功したということであり、ここではA氏自身のことへと段階的に（しかも瞬時に）話題の調整が行われている。

#### 4-2-2「大きな家」(3g) から「泥棒のいる家」(3i) へ

同じような鋭角な谷を作っている個所にグラフ3の3hがある。3hの大きな谷を挟んでその前の3gでは、散歩中に目に入った「大きな家」が話題になっている。3gの谷の後3iでは、「泥棒のいる家」について話題にしている。結果からすると、連想的には、〈大きな家〉→〈お金持ち〉→〈泥棒（狙う人）〉という連関が出来ていて違和感がない。しかし会話としては、「大きな家」から「泥棒のいる家」へと話題が移る間に、23秒間何も話さない状態がある。外出時の無声状態（いっさい発話のない状態）としては、23秒が一番長い。次が、15秒間で、ここで問題にしている「大きな家」の話題（3gの頂点付近）が始まる前の会話が中断されていた状態である。その次に長い無声状態が12秒間で、やはりここで問題にしている「泥棒のいる家」の話題（3iの頂点付近）の後に会話が停止した状態である。外出時間で10秒を超えるほどの無声状態は、この三か所以外にはない。その過程は次のようである。（「孫のこと」）→無声状態12秒→「大きな家」→無声状態23秒→「泥棒のいる家」→無声状態15秒→（「今日は暖かい」）

「大きな家」(3g) から「泥棒のいる家」(3i) までの話題の選択は、そもそも会話が停滞しがちな中でなされたものだとと言える。会話が始められる時や、停滞した会話を再活性化する時に、たとえば天気や気温のように、話者たちが共有しやすい話題が選択されやすい。本ケースでは、二人で散歩しながら目にはいった大きな家が停滞した会話を再度始めるために選ばれている。

「大きな家」から「泥棒のいる家」(3g-3h-3i) の過程が、そもそも会話があまり進まない状態のなかでの会話であることを確認したうえで、発話内容のみをみる。

#### 会話記録「大きな家」→無声状態→「泥棒のいる家」

1. ヘルパー：うん。
2. 高齢者：あのうちはね、
3. ヘルパー：はい。
4. 高齢者：いいとこのおうちだよ。
5. ヘルパー：まあ、確かに見たからに良いとこって感じ。

6. 高 齢 者：うん、そう。
7. ヘルパー：凄い大きいですもんね、ここ。
8. 高 齢 者：ねえ。
9. ヘルパー：なんかのお店かと思いましたよ、前。
10. 高 齢 者：うん。
11. ヘルパー：でも、ここら辺は本当に大きいおうちが多いですね。
12. 高 齢 者：多いね。
13. ヘルパー：庭がたくさんあるおうちが。
14. 高 齢 者：けっきょくお金があるおうちなんでしょうね。
15. ヘルパー：うん、うらやましいわ。
16. 高 齢 者：いかにも、金持ってるおうちは、こういうのがそうじゃんね。
17. ヘルパー：うん、駅から近いですからね。
18. 高 齢 者：そうそう。
19. ヘルパー：それじゃなくても便が良くて。大きいおうちが多いですね。
20. (23秒の無声状態)
21. 高 齢 者：こういう家は大丈夫だかね。
22. ヘルパー：ええ。
23. 高 齢 者：泥棒に入られないようにしてあるだか、入りやすいだろうな泥棒が。
24. ヘルパー：泥棒。
25. 高 齢 者：うん、この家は金があるなあ、とか、ない、ないとかね。
26. ヘルパー：すぐわかります？
27. 高 齢 者：わかるらしいね。

孫のことに関する話題が途切れた後、12秒の無声状態があって、高齢者A氏が、「あのおうちはね、いいとこのおうちだよ」(会話記録の1)と切り出して、目の前の「大きな家」を話題にする。その後も、「いかにも、金持っておうちは、こういうのがそうじゃんね。」(会話記録の16)と言って、ある特定の家を指している。それに対して、ヘルパーは、「でも、ここら辺は本当に大きいおうちが多いですね。」(会話記録の11)という言い方をして、ある意味で大きな家を一般化している<sup>9)</sup>。A氏は、ある特定の家に関してヘルパーの知らない情報を持っていて、「あのおうちはね、いいとこのおうちだよ」とヘルパーに教えるように話をはじめているが、ヘルパーは、その情報を近辺に見える大きな家々のことへと一般化している。ここに、A氏が期待した方向とは違う展開を会話がたどっていった可能性がある。

また、A氏の「大きな家」に対する関心は、「けっきょくお金があるおうちなんでしょうね。」(会話記録の14)や先の「いかにも、金持っておうちは、こういうのがそうじゃんね。」(会話記録の16)という言葉から、お金持ちであることに向いていることがわかる。それを受けて、ヘルパーは、お金持ちであることの理由として、「駅から近い」土地であり、交通の「便が良」い土地であること、つまり価値の高い土地に立っている家であることを補足する。続けて、再び「大きいおうちが多いですね」と付け加えこの後、23秒間の沈黙に入る。A氏の「大きな家」への関心は、自分の家の近所にあり、ある種の事情を知っている家のことから始まって、「お金持ち」であることへと向いている。それが、後に「泥棒が入らない

か」という話題へと繋がることから、いわば即物的で卑近な関心にとどまっていると言える。それに対して、話題の大きな家が立つ近所に住んでいるわけでもなく日常的に関心に向けてることのないヘルパーは、よく知らない地域に立っている大きな家々一般に関心に向けていて、「お金持ち」であることも土地の位置関係等の中性的な知識の方へ会話を向けていく。このズレが、会話を中断させる要因として想定できる。

23秒後に、再び話題を提供したのは、A氏である。「こういう家は大丈夫だかね？」(会話記録の21)とあり、泥棒の入る可能性について話し始め、しばらくこの話題で会話が活発になされていく。A氏が、近所にある大きな家々に泥棒が入る可能性へと話題を向けていくことは、近隣の者としてリスクを共有している心配や、近所のお金持ちに対する憧れや嫉妬を含んだ興味に基づいている<sup>i</sup>。知らない人々の幸せは祝福できても、身近な人々の幸せは嫉妬に変わりやすい。反対に近所の大きな家に対するこの感覚を持っていない外部の者であるヘルパーだからこそ、冗談で「うらやましいわ。」(会話記録の15)と言えるのである。ともかく、大きな家の近所に住むA氏の泥棒に関する話題の選択からさかのぼると、ヘルパーが口にした「大きな家々」一般のことやお金持ちであることの中性的な知識等は、A氏が望む話題の展開からは外れていた。そのために、大きな無声状態が生じ、3hのような大きな谷ができたと考えられる。また一方で、「大きな家」(3g)の話題に含まれていた話題展開の可能性を再度見出すのが、ヘルパーではなく、普段から興味をもっている高齢者A氏であるというのも、発話量がいわゆるV字回復していく理由であろう。

## 注

- <sup>i</sup> 話題の選択及び言葉を繋げていく行為者の実践的な感覚については、ブルデュ, P.『実戦感覚』(2001)。話題の展開及び連続的な文脈の生成については、林宅男編『談話分析のアプローチ』(2008), P.156-174。実際の要支援高齢者とホームヘルパーとの談話(または話題)の展開及び連続性については、小野田「高齢者とヘルパーとの会話の特徴」第23回社会言語科学会発表論文集, 2009年。
- <sup>ii</sup> 10秒間隔の文字数とは、たとえば 00:00:00 (0秒)の時点での文字数は、00:00:00~00:00:10 (0秒から10秒未満)の文字数の合計である。本研究のようにより大きな時間間隔で作るグラフとの比較をするためには、本来的であれば、たとえば 00:00:10 (10秒)の時点での文字数は、00:00:05~00:00:15 (5秒から15秒未満)の文字数の合計でみるのが理想であろう。今後の課題である。
- <sup>iii</sup> 30秒間隔の文字数とは、たとえば 00:00:30 (30秒)の時点での文字数は、00:00:20~00:00:50 (20秒から50秒未満)の文字数の合計、60秒間隔の文字数とは、たとえば 00:01:00 (60秒)の時点での文字数は、00:00:30~00:01:30 (30秒から90秒未満)の文字数の合計、120秒間隔の文字数とは、たとえば 00:02:00 (120秒)の時点での文字数は、00:01:00~00:03:00 (60秒から180秒未満)の文字数の合計である。30秒間隔の文字数のカウントに関しては、10秒間隔の文字数の数え方と同じく、本来であれば、前後15秒の合計が望ましい。本研究では、簡易的な方法を優先した。
- <sup>iv</sup> 高齢者A氏とヘルパーとのディスコースを、モードの違いとして見る場合には、ブルーナー, J. 及びホワイト, M. の物語的思考モードと論理科学的思考モードの対比が参考になる(J.

S.ブルーナー『可能世界の心理』(1998)及びM.ホワイト他『物語としての家族』(1992)。金剛出版1992年。

- ▽ 高齢者A氏とヘルパーの「大きな家」についての利害関心のずれについては、ある意味では、現場の利害を負いながら実際に生活する人と現場の利害から中性的でいられる（または現場の利害を感じ取ることができない）観察者（研究者）との対比が参考になる。ブルデュ, P.『実戦感覚』(2001)。